

陳舜臣さんを語る会通信

NO.16 Aug. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年8月20日

陳舜臣さん、盧溝橋事件からの1年半を回想に託して書いた『桃花流水』

『残糸の曲』と『桃花流水』について、集英社『陳舜臣中国ライブラリー 7』「自作の周辺（稲畑耕一郎氏との対談）」（以下、「自作の周辺（対談）」と略記）は必読です。対談中、稲畑氏は、二作を「**一对のもの、連続するもの**」とみなし、「**ともに詩からタイトルを取っていますね。『桃花流水』は蘇東坡、『残糸の曲』は李賀**」と発言、陳舜臣さんはそれを肯定しています。

本号では、まず、蘇東坡の詩から見ていきます。

（編集委員 橘雄三）

《1. 王定国の蔵する所の「煙江疊嶂図」に書す》

北宋の詩人蘇軾（そしよく 号は東坡 とうば）に、見出しの題の28行に及ぶ詩があります。下にあげたのはその最後の部分です。

下線は編集委員の加筆。

桃花流水在人世
武陵豈必皆神仙
江山清空我塵土
雖有去路尋無緣
還君此畫三歎息
山中故人應有招我歸來篇



陳舜臣著『中国詩人伝』
「蘇軾」 李庚・繪

上からの2句に次のような訳がついています。

桃花流水と歌われたところ（それは李白が言うようにに別天地であろうか、いや、そうではなく）実はこの世のほかではない。武陵の桃源郷、そこに住んだ人々も、仙人ばかりでもなかったろう（ただの人もそこへ行けるはずなのだ）。（『中国詩人選集二集6 蘇軾下』岩波書店）

そして、それは、『桃花流水』の最後、父が娘に言う言葉、

「桃花流水の理想郷は、人びとが自分で作り出すものだよ」に重なりますし、『桃源郷』のテーマにもつながります。

《2. 盧溝橋事件からの1年半を回想に託して》

上掲、「自作の周辺（対談）」から抜粋引用します。

下線は編集委員の加筆。

稲畑 この作品の時代背景は、日中戦争の発端である盧溝橋事件（1937年7月）が起こった年の春から翌年秋の日本軍による武漢攻略の直前までの時期です。

陳 盧溝橋事件は私が中学二年生、十三歳のときだったんです。ちょうど物ごころがついてきたころで、半分ぐらいおとなの目でものごとが見える。この作品は、そんな時代を私の回想に託して書こうとしたものなんです。自分が現に見てきたところ、生きた時代をです。

それで、自分の境遇に近い人物を主人公に持ってきたんですけどね。しかし、これはやっぱり難しいですよ。自己体験の生々しさを抑制しつつ、小説に仕立てなければならない。で、むしろ女性という立場から見たほうが書きやすいんじゃないかという気がしたんです。

■『桃花流水』の記述は「盧溝橋」ですが、上掲「自作の周辺（対談）」では、「盧溝橋」です。出典に合わせました。



盧溝橋事件を報じる朝日新聞1937年7月8日夕刊 北平は北京のこと

「残糸」アイデンティティーを求める旅 と 「桃花」自己の存在の「根」を確かめる旅

『残糸の曲』『桃花流水』比較表

作品名	残糸の曲	桃花流水
作品の初出	『週刊朝日』1970年1月2日～12月25日	「朝日新聞」1975年7月1日～76年11月10日
タイトル典拠	李賀の詩	蘇軾の詩
描かれた時代 主人公の年齢	「元号が大正から昭和へと変わる1926年早春から、満州事変や二・二六事件を経て、盧溝橋事件の翌日まで」 主人公が尋常小学校を卒業し、神戸の父・関啓成（かん・けいせい 中国籍）に引き取られるところから小説は始まります。主人公12歳～23歳	「日中戦争の発端である盧溝橋事件（1937年7月）が起こった年の春から翌年秋の日本軍による武漢攻略の直前までの時期です」 主人公21歳。神戸の北野町にある根津家の一員として生活しています。外出から戻ったばかりの主人公が、ハンドバッグに、黄色い紙片が入っているのに気づくところから小説は始まります
主人公	関修平（かん・しゅうへい）	程碧雲（てい・へきうん）
出自・国籍	4歳で孤児となった修平は、名張の母の弟に当たる水野家で育てられます。「修平の姓は関で、これまでセキと読んでいたのだ。水野菊子という名の母親が、関という家に嫁ぎ、生まれたのが自分である、と修平は理解していた」 中国籍。父は中国人？ 母は日本人	父は程範、母は張芳珠。上海で育ちます。12歳のとき父と死別。父の親友であった根津宏二郎に預けられます。母は父の死ぬ更に3年前に亡くなっています。母のふるさは日本統治下の台湾 中国籍。両親とも中国人

《3. 『残糸』と『桃花』は「一対」とおっしゃるけれど》

前掲、「自作の周辺（対談）」から、抜粋引用します。

陳 昭和の初めから日中戦争にいたる時代の風を、『残糸の曲』では書いたんです。

稲畑 その主人公も、また…。

陳 自分のアイデンティティーを求めるというテーマです。

「その主人公も」と「も」が付いているのは、『桃花流水』の主人公も、『残糸の曲』の主人公もという意味です。ですが、両作品の主人公の出自、置かれている状況はかなり違います。

『残糸の曲』の主人公・関修平の、父は中国人、母は日本人という出生・出自は、後半、揺らぎます。

一方、『桃花流水』の主人公・程碧雲は両親とも中国人で、国籍もずっと、中国籍です。ただ、12歳から9年間、日本人家庭で成長したということがあります。碧雲の場合、黄色い紙片の文言にもあるように、「中国人であることを忘れるな」であって、自身のアイデンティティーを求める関修平とは求めるものに差異があるようです。

《4. 日本の大陸侵略・戦局の詳細な描写》

右上の一覧表のとおり、『桃花流水』における、日本の大陸侵略・戦局の描写は詳細です。特に、盧溝橋事件に続く一連の出来事の記述は細部にわたります。それが、ストーリーの進展に割って入るので、すから話は途切れます。読み続ける新聞読者は、辛

抱強いというか、知識欲が旺盛といえます。

1936. 12. 12	西安事件
1937. 7. 7	盧溝橋事件勃発
7. 17	蒋介石「最後の関頭」演説
7. 25	廊坊事件
7. 26	広安門事件
8. 9	大山事件（第二次上海事変起こる）
9. 23	第二次国共合作成立
11. 11	上海完全占領
11. 20	国民政府、重慶遷都宣言
12. 13	南京占領。虐殺事件起こる
1938. 1. 16	「国民政府を相手とせず」声明
5. 19	徐州占領
9. 27	武漢3鎮占領

遡って、西安事件についても詳述されます。陳舜臣さんは作品中、張学良が「視察にきた蒋介石を監禁する『兵諫』をおこした。兵をうごかして諫めたのである」と記述しています。下の写真はその現場です。中華人民共和国は、1980年代に入り、蔣経国総統に第三次国共合作を呼びかけますが、配慮から、「捉蔣亭」→「兵諫亭」と変更しました。



西安の驪山中腹「兵諫亭」
編集委員撮影

『桃花流水』 登場人物&あらすじ

主 な 登 場 人 物	
程碧雲	主人公の中国人女性。12歳のとき父と死別。その後、父の親友であった根津宏二郎に預けられる。神戸の北野町に住む。母は父の死ぬ更に3年前に亡くなっている。見合いで戸山祐介と知り合うが、戸山の言動に感じる溝は深まるばかり
程範	碧雲の父。上海財閥、程家の三男坊。40歳で死去。死を報じる新聞記事、「多年、左傾活動をしていて、党派的にも複雑な背景を持っていた」。自殺説も
張芳珠	碧雲の母。実家は台湾
程昌	程範の兄、上海程園の主
根津宏二郎	碧雲の父・程範の親友。根津家の次男。根津商会の上海支店長も経験し、今は社長
根津佐紀子	根津家の娘。碧雲と実の姉妹のように暮らす。塩見彰三と結婚
塩見彰三	歴史の助教授。美術史家。根津佐紀子と結婚。徴兵で中国戦線へ送られる
戸山祐介	医者の子。碧雲と見合いをし、恋慕へ
李承明	“赤竜先生”と呼ばれる抗日救国運動の活動家。碧雲の父とは上海のプロテスタント系大学で一緒だった
陳鉄竜	“竜の子”と呼ばれる抗日救国のメンバー。赤竜の使い。神戸の中華料理店で働く
李河	赤竜先生の甥。筋金入りの活動家。通称“カワちゃん”
張進功	碧雲の母の兄。台湾で茶事業を営む
張永銘	進功の長男。家業を継ぐ。碧雲に紹介してもらい上海のフィクサー林秋竹に結びつく
張永峰	進功の次男。台湾で抗日の同盟休校を先導し、放校になる。大陸へ渡り、秘密結社・非幻庵に加わり、抗日戦で戦死
杜英堂	台湾一の金持ちで名望家。頑として日本に同化しない
林秋竹	上海暗黒街最大のボス。大実業家で第一級の紳士。民族主義的なところがあり、意外と人気がある
劉芝君	碧雲の父の姉の長女。40過ぎの未亡人。北京・琉璃廠で美術店・粹宝堂を営む
黄永章	銀行の幹部であり、抗日救国戦線の一員。一時、思想的に動揺する。上海の永章邸で、主の長期不在中に碧雲の父の死体が見つかる
伍道昌	印刷労働者で労働運動の活動家。程範の死体発見者
曹仙妹	両親を知らぬ奴隷だったが、伍道昌に助けられ、労働運動のなかで鍛えられ、抗日救国の闘士となる
村上兼志	炭礦王・村上家の御曹司。異母弟に家業を譲り、北京で「日本と中国の若者のあいだの意思の疎通をはかるための仕事」をしている。抗日救国グループから危険人物視されている
文素容	秘密結社非幻庵の女主催者。抗日救国グループは、その主張と実践を疑っている
村上邦宏	村上兼志の異母弟。社長業見習中
村上多美子	邦宏の母。村上家文化人サロンを主宰
楠村秀子	村上多美子の異腹の妹。文化人サロンの事実上のクイン
江淑華	南昌の傷病兵収容所で働く四十歳すぎの女性医師

《1. 神戸、北野町の根津邸》

1937年春、神戸の北野町にある根津家。外出から戻ったばかりの程碧雲は、ハンドバッグに、黄色い紙片が入っているのに気づきます。毛筆で書かれた、いつもの決まり文句、「碧雲よ、中国人であることを忘れるな。きみの父は愛国者であった。父の名をはずかしめてはならぬ。



一九三七年四月十二日 竜」の後に、鉛筆で「竜に会いたいか？竜はきみの父親の死のもようを知っている。もし会いたければ、明日の午後三時、元町一丁目『天外天』の帳場に、竜の子に会いたいと申し出よ」と、書き足されていました。

紙を見た碧雲が竜に会いに行くところから話は始まります。上の画像は中公文庫版の表紙です。

《2. 碧雲は母のふるさと植民地台湾へ》

碧雲は、母方のいとこの結婚式に出席するため、母のふるさと、台湾へやってきます。

碧雲は基隆港の岸壁のむこうに見える景色に、なつかしい。はじめて見る土地なのに、このなつかしさは、いったいなにであろうか？

(亡き母のふるさと。……母のふるさと……)

と、胸のなかでくり返します。

続けて、陳舜臣さんは、兄の家族と対面した碧雲の心情を次のように描写します。

やっぱり身内だわ。——

碧雲はしみじみとそう思う。理屈をこえた感情であるらしい。なつかしさがいっぱいである。彼女はこんなに興奮している自分を、いとおしく思った。十二のときから、ずっと他人のなかで暮らしていたのだ。親切に扱われたとはいえ、やはり血のつながりに飢えていたのである。

《3. 陳舜臣さんの「日本の台湾統治」観》

(日本の台湾統治は、朝鮮のそれより比較的うまく行ったという人がいますが、)私は、そうは思わない。あの時代、むしろ台湾人は日本にいじめられたということがあるんですよ。台湾人も台湾民衆党(のちに日本によって解散させられた)や新文化協会をつくって日本に抵抗しています。(中略)

この「桃花流水」にも書きましたけれどね。ところが日本に差別されたなんて、今の台湾の若い連中は知らない。(前掲、「自作の周辺(対談)」)

『桃花流水』 あらすじ (続) 碧雲の身边には「反日」「救国」の組織が…

《4. 碧雲の身边には「反日」「救国」の組織が…》

『桃花流水』には、反日、反帝、救国、そしてそのなかにも、民族派あり、共産主義あり、多くの組織が登場し、その活動が詳細に描かれます。なかには、「日支親善」を標榜し、日本の策謀に組みする組織もできます。

碧雲は台湾滞在中、程家の主、伯父・程昌の訃報に接し、上海へやってきます。そして、父の死体が発見された邸の所有者や死体の第一発見者など、父の死の状況を知る人たちが登場しますが、その多くが、反日、救国の組織に属している人たちで、父・程範も「救国」の運動にかかわっていたようだということがわかってきます。

《5. 碧雲、「巢立ちの旅」 北京へ!》

上海で、突然、台湾のいっこ・張永峰から呼び出されます。永峰は仕事で北京へ行くといひます。

「どんな仕事なの?」

「救国だよ。いま華北がいちばん危ない。第二の満州国がつくられそう。中国存亡をきめる最後の時期は、ほんの目の前に迫りつつある」

永峰は、碧雲に、一緒に北京へ行ってほしそう。

直後、碧雲はハンドバッグにあの黄色い紙片を見つけます。「——碧雲、誘われたら北京へ行け。竜」

北京に住む、父方のいっこ・劉芝君に、以前から誘われてもいたし、北京への誘いはほかにもあり、「碧雲は自分が北京へひき寄せられているのは、もうまちがないことだ」と確信します。

碧雲は、北京行きを「巢立ちの旅」と感じます。

北京について間もなく、盧溝橋事件が勃発します。

《6. 碧雲、「しごと」「希望」が見つかりそう!》

碧雲は北京で再会した、根津佐紀子の婚約者・塩見彰三に、「碧雲さんは神戸にいたときよりも明るくなりましたね。やっぱり生まれ故郷に帰ると、人間、ほっとするのでしょうか」と言われます。

これに、碧雲は、「あたしが明るくみえたとしたら、国に帰ったからというよりは、希望がもてたからでしょう」と答えます。そして、碧雲は、口から出た『希望』ということばを、いまあらためてかみしめている自分に気づきます。

北京へやってきた碧雲は、「救国」の組織に関係しながら、大同、包頭、西安と中国北部の各地、そして華中、南昌の野戦病院へと移動します。これは、自己の存在の「根」を確かめる旅でもありました。

陳舜臣さんの作品はミステリ仕立てのものが多く、これ以上、筋を辿ることはやめておきましょう。

《補足1 ■ 西安の碑林でのできごと》

西安の碑林でのできごとです。

「景教碑はあちらですよ」

「ああ、そうですか。……ありがとう」

碧雲はあわてて礼を述べた。(中略)

高さ三メートルほどの石碑で、小さな字でぎっしりと書きこまれた碑面の上部に、一大秦景教流行中国碑と大きな字で三行に彫られていた。(中略)

「景教はキリスト教内では、異端といわれて、たいへん圧迫されたんだよ。圧迫されると、強くなるものだね。……人間でも、宗教でも、国家でも……」

石碑のうしろから、そんな声が聞こえてきた。

(下の画像は編集委員撮影)

《補足2 ■ 陳舜臣さんの言「寄り道し過ぎた」》

前掲、「自作の周辺(対談)」から抜粋引用します。下線は編集委員の加筆です。

「桃花流水は二十五年前に書いたのです。今の気持ちと少し違うところがあるんです。その辺りを書かなければならない気持ちもあるんですよ。そうすると、山河在りの次の時期を書く…。それまで命がもつかどうか、まあ、わからんけれどもね。

あのときの、たとえば大東亜共栄圏ということですね。当時の日本が描いていた思想は、まやかしてね。それとは違う、東亜という理想主義的な意味の地域ですね。そういう形で東アジアの人たちが、一緒になってものごとをやって行くことは、もうしばらくすれば実現できるんじゃないか。そういう微かな希望を、最近持ちだしたんですよ。(中略)

そういう目で見ると、これから書かなければならないんですけどね。それは自分の作家的な路線です。どうも今までは、寄り道し過ぎたという感じもしますね。

残念ながら、危惧が現実になってしまいました。もう少し、執筆の時間がとれていたらと悔やまれます。

